

## <座談会>日本文学科の戦後：法政大学国文学会の足跡(3)

著者	正木 信一，川村 幸次郎，鈴木 敬司，鈴木 和雄， 杉本 圭三郎，堀江 拓充
雑誌名	日本文學誌要
巻	27
ページ	53-80
発行年	1982-12-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019350">http://hdl.handle.net/10114/00019350</a>

## 日本文学科の戦後

——法政大学国文学会の足跡(3)——

### 敗戦まで

——今日は、どうもありがとうございます。昭和二〇年代の国文学会の動向をふりかえってみたいと思いますが、お集まりいただいた方の卒業年度から確認していききたいと思います。正木先生は一九四五年の九月、川村さんは一九四九年の三月、鈴木さんは一九五二年の三月ということですね。敗戦直後の卒業の方と、三〇年に近い鈴木さんまで、三、四年とばした感じでお集まりいただきました。

今日の話は、二十五、二十六号をうけて、先ほどいいましたように敗戦前から三〇年代のはじめあたりを主に検討する形で進めたいと思います。当時の文学部、とくに日本文学科の状況、それと学校全体の状況や皆さんがおそわった先生方の思い出などをまず話していただきたいと思っています。

ともかく二〇年代は非常に厳しい時代で、社会が揺れ動いていた

出席者

正 木 信 一  
川 村 幸 次 郎  
鈴 木 敬 司

聞き手

編集部  
（鈴木杉堀）  
鈴木 本 江  
和 圭 拓  
雄 三 充

し、どうなるか先がわからないような時代——そういう中で勉強なさった皆さんのいろいろな思い出やエピソードを話していただけたら幸甚です。それは、必然的に激動の二〇年代の社会や政治・経済などの状況をも含む形になってくるんじゃないかと思います。ただここは政治学科や経済学科じゃありませんので主に文学活動と絡めながら、国文学会の足取り、戦後文学を含めた文学の一般的な状況についても触れていただければ興味深い話が展開されることになると思います。

その際に、昭和三十二年、一九五七年になって、「日本文学誌要」が復刊されている、つまり二〇年代には復刊の動きがなく、三〇年代の初めに復刊されているんですが、どういう理由で復刊が遅れたのか、よくご存知の場合には詳しく触れていただけたら、資料を作るのに非常に有益なんじゃないかと思います。

それでは正木先生、ちょうど一九四五年、敗戦直後の九月の卒業

ということ、非常に不規則な卒業なんです、敗戦とその当時の国文学科の様子などから、口火を切って下さい。

**正木** 一〇年代の方——これは小田切先生もそうなんですけれども、一〇年代というのは日中戦争が始まるわけですし、非常に窮屈になってくる時期ですね。私は附属の中学校で、当時の国文学科を卒業された方に教わっていました。その先生とのつながりで中学生でしたけれども時々国文学研究室なんか遊びに行きまして、当時の学生さんたちとも親しくなりました。なにか、そういう社会的な窮屈な状況、そして緊迫した空気というものを、なんとなくその時に感じることはできましたね。

それから、これも中学生の時一九三八年の二月頃だったと思うんですが、いわゆる第二次の人民戦線事件です。法政の美濃部亮吉、それから南謙二、阿部勇の三人が捕まったということがありました時に、中学生は全員講堂に集まれというわけですね。もう今はなくなっちゃった講堂ですが、そこで、実は大学の先生の中でいささか問題があったけれども、これは大学の先生の中で、しかも個人的な研究に関してであって君達は関係がないから心配ないという話です。ところが中学の一、二年生なんていうのは、そんなことはわかりやしないんですね。だけど、学校のほうじゃ非常に神経を使ってそんな説明をしたことがありました。

これは日文科とは直接関係はありませんが、その後間もなく附属の私の中学の校長が、軍人校長に代わるんです。大学全体が、変って行くんですね。

——それは何年でしょうか。

**正木** 『百年史』の中にも出てますけれども一三年頃、一九三八年頃から大学のほうの管理者に軍人がだんだん入り込んでくるという状況があるわけでしょう。それと恐らく同じような形だと思えますが、軍人校長のもとで法政中学校は教練学校になっちゃうわけですね。大学のほうは、そのあとで軍事教練が必須になってきて、配属将校が顔を効かすというふうになってくるわけですね。

その間に、小田切先生のお話にもありましたような文学部の改造問題が出てくる。そして、小田切先生が恐らく最初の半年繰り上げ卒業のはずなんです。半年じゃなくて、三カ月かな？ 小田切先生は本来なら一六年三月の卒業のはずなのを、一五年一二月に卒業されている。その次の年から今度は九月に繰り上げられます。まあ、私の次あたりまでが九月卒業で、その先になると三月というふうに戻ったと思います。

私の学生時代、私は先ほど言いましたように中学時代から多少つながりはあったわけですが、近藤先生の学問というものにも一応は、わからないながら中学生もある程度は触れていた、という気がしています。そして、将来何になるか、という勉強をするのかと、みんな中学校上級になって決めなきゃならないという時、なにか私の場合は非常に自然な形で法政の国文以外に行くところがないみたいな形になって行っちゃったんです。その点、少し特殊かと思えますけれども、予科の時代——この予科というのも半年繰り上げで、旧制中学の五年を卒業していきますと二年間ですが、それが一年半で、九月で終わっちゃって一〇月から学部へ進む。それが一七年ですね。小原先生と入れ代りになるわけです。

私が学部へ来てみますと、それまで本校の時間割を貼ってあるところに見えていた先先方の名前が、ずいぶん変わっているんですね。かつて見た時には藤村先生とか……。記憶しているのは藤村先生ぐらいだな。それがかなり変わっちゃっている。それで、当時の国文科の先生というのは近藤先生だけになっていました。そして、その一〇月に新たに小田切先生が講師として迎えられます。同時に重友先生を近藤先生が引っぱってくる。ところが重友先生は、ちょうど長澤先生がおいでにならなくなったので中国文学の系統をやる、というよりも中国文学そのものではなくて、日本漢文学史という講座を重友先生がお持ちになったんです。あと国語学で岩淵悦太郎先生ですね。国語・国文関係ではそれだけなんです、近藤先生、小田切先生、重友先生、岩淵先生と……。そう、あとは講師で久松潜一先生が来ていられたね。国文関係ではその五人だけ、しかも専任の教授としては近藤先生だけなんです。あとは全部兼任講師です。そういう状況で、学部での私の生活は始まりました。

小田切先生は日本小説史という授業をやられて、講義の最初は『古事記』で、一回で終るんです。そして来週は『日本書紀』をやりますから読んできて下さい、というんです。ギョツとしましてね、(笑)一週間で『日本書紀』を読んでこいというんですから。『日本書紀』と、できたら『万葉集』もやります、と言うんだ。万葉も読んできて下さいというのには、ずいぶん驚きましたけれど、まあ二週目に『日本書紀』、三週目に『万葉集』と、ものすごいこなし方なんです。これにはどうも弱りましたけれど、しかし僕は教師になってから時々その手を使うことにしまして、(笑)学問というも

のはこういうものだ、とか学生に言ったりね。(笑)しかし、ともかく非常に新鮮な感動をもって小田切先生のお話を聞きました。

近藤先生は何をやられたかといいますと、古代・近世・近現代と全部ですね。古代のほうは後期ですけれども、講読みたいな形で源氏をやりました。これは割り当てられてやらされる。それから近世は西鶴・近松ですね。近代は、ちょうど僕の入った三年の時には荷風・潤一郎ということで、これは上級生の担当が決まっていたんですが、それに下級生をくっつけて、一緒にやってこいということだったわけです。最初は無我夢中で、どう切込んだらいいのか、コンビになった上級生がまた厳しい——「ぼくもよくわからないで苦労してるんだから、君は君で考えてきてくれよ。」と突っぱなされる。荷風・潤一郎のあとは鷗外・漱石と進んでいったわけですが、この近代のゼミがやはり一番近藤先生から絞られたというか、鍛えられたところだったろうと思います。近代は、授業のほかに、私の学部入学時に助手になられた小原さんが、横光の『旅愁』で私たちの研究会を指導して下さいました。

中世に関しては近藤先生の別の講義で、文芸史ですね。そこでは、また古代からずっとやられるわけですが、古代のほうが大変詳しくて、年度の終り頃になって中世から近世までバァーッとやる。そこで、ちらっと中世のお話をうかがったわけです。近世は大体ゼミの形でやっていましたから、古代から中世はその文芸史の中での重要なところだったんです。実は私が卒業論文で中世を選んだというのも、近藤先生からゼミで詳しく聞いた時代の範囲でやると、全部近藤先生が話されたり、書かれたりしていることばかりに

なっちゃうだろうと思っただけです。

あと、しばしば近藤先生は参考書を紹介なさって、この紹介の仕方がなかなかうまいんですね。当時は旧制で、高等師範部というのがありまして、ゆうべ高等師範部の諸君にこういう参考書を紹介したといってプリントを配るわけです。そして、君達にはこれは必要ないだろうと思う、当然もう読んでいるだろうからと。ところがみると、これも読んでいない、これも読んでいないというものばかりなんで、終ってから神田にすっとなで行って探すわけですが、神保町から駿河台下までの本屋を一軒一軒探してもなかなかないんです。特に社会科学系のもの——これは、めったに推薦図書としてそんなプリントに載せることはなさなかったんですけれど、どうしても何か理論的なもの、社会科学的なもの、あるいは文学の背景をなすものを考える上に必要なものを読まなきゃいけないだろうというんで、友達と一緒に神田を歩きながらそういう本も探しまわりましたが、まず見つからない時代になっていました。

——それは何年ぐらいのことなんでしょうか？

正木 一七、八年ですね。

——近藤さんが逮捕されたのは一九年ですから、その直前ぐらいの状況ですね。

正木 ええ、私が一七年に学部一年に入り、一八年に二年生になるわけですが、一八年の一〇月になると新入生というか新一年生が入ってきます。これは、もう一二月一日には全部軍隊にとられちゃうということが、はっきりしているわけです。一八年の八月ですよね、徴兵猶予がなくなっちゃうということが決まったのは。だから

一八年一〇月に新しく学部へ来た人達というのは二カ月の時間しかない。すると、——この連中はものすごく、本当に文学が好きで国文へ入ってきたんだから二カ月の間にできるだけ読みたい、というんですね。

もうその頃になりますと、近藤先生以外にはほとんど授業がなくなっていました。小田切先生はご病気でお休み、重友先生もほとんど来られなくなっていました。久松先生も、私が三年を終った時点で来られなくなっていたと思います。ですから、私の一年下の人達は近藤先生以外の授業は受けていないだろうと思いますね、多分。それだけに自分達でやろう、研究会をやろうと。それでは、というので私と、それから私の一年上の加藤正忠さん、そういう人達も一緒にになって、それじゃ読もうというんで計画を立てましてね。その時ですよ、さっきの小田切先生のやり方を利用したのは。今週は『古事記』、来週は『日本書紀』、その次は『万葉集』をやるという調子で、ものすごく詰めたスケジュールでした。『源氏物語』は私もお手上げだったものですから抜かしちゃいましたけれども、とにかく土佐・竹取・伊勢はやりました。それから古今・新古今をやった。しかし、それほど詰めてやっても、そのくらいで終わりましたでしょうかね。あとは一二月一日になっちゃったと思うんですが、しかし、その間の私の一年下の人達の意欲と気迫は、私はいまだに思い出しますけれども、打たれましたね。まあ、とうていそれだけでわかりっこないですけど、でもその姿勢というのは非常に貴重なものだったと思っています。

それで、私は軍隊へ入ってから半月で病気になるしまして、そのあ

と五月の末だったと思いますが召集解除になったわけです。しばらく間をおいて、また研究室へ行くようになったんですけども、これが一九年ですね。一九年の夏近くになりますと、授業は全部ない。学生は全部工場動員に行かされる。ただ工場では週に一回、電休日というのがありまして、休みになるわけです。その時には、みんな六角校舎の三階の研究室へ集まってくるんですね。集まってくるといっても、それは体が悪くて軍隊には行かなかった加藤正忠さんや病気で帰された私、あとは女性と、もうひとり僕の一年下で左の目が悪いために兵隊にとられなくて、いま法政一高で私と一緒にいますけれども明石君、それだけなんです。女性の方が二人、男が三人でしたか、とにかく四人から六人ぐらいが研究室へ集まる。その時は近藤先生も来られるんです。じゃ、やりましょう、というんで、とにかく何かを読むということをやっていました。これは一番楽しいことだったんですね。研究室の中だけは、本当にいろんなことが言えるんです。

その頃も本屋へ行って本を捜したりしましたけれども、時たま不思議な本があるんですよ、たとえば風早八十二の『日本社会政策史』なんていうのが。そうすると、それを加藤さんと二人で「風早さんの……」というようなことを話していると、後ろから肩を叩く人がいて、近藤先生なんですね。「そんな人の名前をこういう所で言っちゃいけません」と、それで「お茶を飲みに行こう」ということになる。お茶といっても満足なコーヒーもなかったですけど、とにかくそんな時代でした。ですから、本というものが少なくて、読むものが少なくて、従って一番勉強できなかった時代ですね。

——その頃は法政大学の外の国文学界は、みんな軍国主義・国粹主義で、どうしようもなかったでしょうね。

正木 そうです。どうしようもなかった。

——だから本がたとえ出ても、あの頃の新刊書は、ほとんどみな軍国主義迎合の国文学界の傾向を反映したもののばかりだったでしょう。

今の六角校舎での話は近藤先生からしばしばおうかがいしましたがけれども、ただ永積先生とは正木さんは大学の中では……。

正木 会わなかったんです。会わないというか、永積先生からは教室では教わらなかったんです。

川村 来て欲しいというような要望はあったんです。僕らの同期の頼住君、滝瀬君なんか「永積さんと呼ばうや、呼ばうや」と言っていました。その要望が翌二十二年に実現され、徒然草などを中心に封建制下の文学を講じられたようです。僕はその曜日は出席出来なかったのですが。

正木 ええ、それは川村さんの頃のことなんです。私の頃は永積安明という名前さえも最初は知らなかったんです。

川村 ああ、そうですか。

正木 近藤先生から聞いて知ったんですが、永積さんの論文もめったに目にすることもできなかったですね。ただ、こういう人がいるという……。

——ただ、珍しく永積さんの『中世文学論』は、そういう状況の中での出版ですね。昭和一七年……。

正木 一九年ですね、たしか。

——当時としては、珍しい本だろうと思いますね。

正木 一九年に僕が軍隊から、お前は役に立たないといって帰されて、そのあとだったと思うんですけれどね。

——出て、すぐ手に入れられたんですか。

正木 ええ。

### 激動期の授業

——敗戦の色も濃くなってくる頃は、またあとで話していただくとして、川村さんは二十四年の卒業ですから在学の時が激動期ですね。

川村 ええ、そうですね。

——もう、明日がどうなるかわからないという感じですね。その頃のことを、いま正木先生がおっしゃったのを受け継いで、お話しただけたらと思います。

川村 私は正木さんとはちょうどすれ違いで昭和二十一年四月の入学です。但し正木さんは大学院生として研究室へ来ておられたから度々お会いしました。年は正木さんより上だと思えます。私は大体六、七年遅れているんですね。というのは、公立の師範学校を出まして茨城県の小学校教師をし、まだ若造だったけれどなぜか早く教頭などになったものですから、なかなか勉強出来なかったし、その上高等科（現在の中学）の生徒が軍事工場へ動員されてたものですから、その引率で殆んど軍事工場へ出張していました。そういう矢先の敗戦でした。動員中は夏休みもなかったがあの日は重大放送があるというので学校に止まって、全校生が暑い校庭で天皇の放

送を直立不動の姿勢で聞いた。校長が戦争は負けになったと告げると生徒達はオイオイと声を立てて泣き出し、ヘナヘナと校庭に崩れてしまったのを思い出します。特に高等科の生徒は工場から配布されたオールスの作業衣に鉢巻姿で、「こんなに一生懸命飛行機作りをしたのに口惜しいーッ」といつまでも泣き崩れていましたっけ。

そんなわけで私も虚脱状態が続いた。何とかしなければと転機を求めていた。勉強もしなおさなくちゃと考えてました。転機の一つとして転任を願った。故郷に近い県都水戸市のある校長と話し合いがついた。ところが、そういう取引が人事担当の県視学の心証を悪くしたようでした。その為でしょう、二十一年三月末の異動で全く予想外の隣村の小学校の教頭に転出させられました。それで決断がつかしました。辞職して進学しようと。進学の意志は師範在学中からあったのですが、二度程失敗しましたし歳もとったので諦めたのです。それが、こういう事情で焼木杣に火がついたわけですね。

しかし、四月になっちゃったでしょう。一年待たねばならんかなと思ってる時、新聞で四月半ばに入学試験をする大学を二・三見つけたのです。それで法政を受けたのです。同僚が一足先に高等師範部へ入っていて国文学には近忠さんがいるよなどと聞かされたことがありました。

私は師範が専門学校として国立に移管される前の卒業ですが、専攻科等に学んだ者は専門学校卒同等と見なされ、大学の門をくぐる事が出来たのです。入学式は五月上旬になったと覚えています。キャンパスは現在よりずっと狭く半分位だったでしょう。焼け残

った鉄筋校舎が三棟。門（今の正門よりも左）を入った所に六角校舎、その左側に第三校舎（旧図書館）、右側（今の正門辺）に総長室などのある新館があった。あとは第三校舎北側に内部のガラーンとした平屋のバラックがあつて、事務センターをなしていた。追つて六角校舎の南裏に二階建の研究室棟が出来ました。校庭には一本の木もない荒涼たるものでした。校庭前の道路沿の公園にも大した木はなかったが、それでも青々とした芝草が荒み勝な心を慰めてくれましたよ。

ひどい所へ入ってしまったなとも感じましたけれども、兎に角意を決し職を投げ出して入ったのだからと心に鞭打って登校しました。キャンパスのみでなく組織やスタッフにも戦争の後遺症が強くあつて授業も満足でなかったですね。

国文関係では、先程正木さんのお話にありましたように、六角校舎の研究室に集まつて近藤先生を待っていることが多かったですね。先生は高名な方ですから大変お忙しくて、時間通りにはなかなか見えられませんでした。院生の正木さんや加藤さんが種々指導して下さいましたね。こういう状態が続いていたのですが、学生達は熱心に先輩の論調に耳傾けながら、今か今かと近藤さんのお出でを待っていた。近忠さんがどうしたのこうしたのなどの雑談を交しながら、これは実にすばらしい事だったと思います。現在の学生には薄れてしまった、師の人格と思想や学殖を慕う麗しい風潮でしたね。現代の学生は大学の社会的虚名にのみ蝟集しているように思われます。

そのようにして授業時間の半ばを過ぎた頃、近藤先生が風呂敷包

みを抱え息せき切つて入つて来られる。一瞬しーんとなる。学生の顔に緊張と喜びの色がみなぎる。先生は一服されてから風呂敷を広げ、新刊の雑誌や手帳を出して本や雑誌の紹介をして下さるのが常でした。学生は真剣にメモしていましたね。本屋へ行ってそれらを探す準備ですね。私は不明にしてメモを紛失してしまいました。が、カーカップという学者の名を先生から聞いたのを、先生の口調のままに不思議と未だにはっきり覚えていのです。国文とは直接関係のない本が多かったと思います。民主的で自由な思想を中心とした書籍を沢山紹介して下さいました。今と違って情報の少ない時でしたから大変有難かったですね。

先生は恐らく、昭和初期から戦中にかけて育つた青年達の、片よつた精神構造をそれとなく練り直そうと意図されたのだと思います。学生はそれらの書籍を入手するのに又一苦勞しました。せっかく苦勞して集めてもひどい紙で製本も悪く、落したりするとバラバラになつてしまふようなものでした。そんなわけで今手元には殆んど残っていませんが、先生の『日本文学原論』と『西鶴』何れも二十一年の印刷のが残っております。それに藤井乙男の『近松世話物全集』三巻本、これは十七年から十九年の印刷で多少ましな製本です。

近藤先生が少し早目にいらつした時は、西鶴や近松の輪読をやりましたが、先生は余り講義なさらずに内容の濃い寸言で指導され、なるべく学生に多く読んだり話させるといふ方法を取っておられましたね。ああいう本の少ない時なのに学生達はよくそれに応じていました。



次に片岡先生ですが、先生は几帳面に講義をなさる方でした。持病に悩んでられたので、休講がちでしたが、一旦出講なさると長時間縷縷と講義なさいましたね。藤村詩集や鷗外訳『即興詩人』を柱にローマン主義を、花袋・藤村らの自然主義、川端・横光らの新感覚派、芥川らの新理知派等々の文学を噛んで含めるように講じられましたね。終るとさすがに疲れるでしょう——しばらく控室で休息されてから帰途につかれるようでした。一度質問の為にその控室へお伺いしたことがありました。

片岡先生はゼミも担当なさった。学生にとってはこの方が大変でした。講義はテキストなしでノートを取るだけの受動的なものでした。ノートするのは大変でしたけれども兎に角聴いていけばよかったです。しかしゼミはそうはいきません。本の少ない時代に何とかして資料を求めてまとめねばならぬ。資料が少ないからどうしてもそれに引ずられる傾向が多い。私は確か同郷のよしみで長塚節を選んだのですが、大分片岡先生の著書に傾斜していました。藤村を発表した学生に至っては、詩の筆を折って『破戒』などの自然主義へ変革して行く辺りは、片岡先生の語り口にそっくりだったのを覚えています。尚小田切先生のに即し過ぎていて上級生からこっぴどくやられた者もありましたね。

当時先生は、茅ヶ崎の北部の農村に住んで居られました。生家だったんでしょうか、門構えのある大きな葦葺の農家でした。二度程駅から二軒程の田圃道を歩いてお伺いしたことがあります。先生は大きな座卓に向い、卓上も身の廻りも本の山にして原稿を書いて居られました。見せて戴きたいとお願いした本を、やおら立って廊下

の本の山から探され埃りを払って見せて下さったのを思い出します。先生の著書は出来る限り集めていたので「よく読んでくれるね」とはおっしゃられたが、質問が幼稚なので呆れて居られたと思います。

西尾実先生にも教わりました。主として世阿弥の講義だったと思います。今でも手元に一八年刊の『世阿弥自筆伝書集』が残っています。川瀬一馬の校閲本ですが、西尾先生の指示によって購入したと覚えています。尚その頃先生の『言葉とその文化』というのが岩波から出版されて大変好評でした。先生は中世文学や国語学の大家であられたし、特に国語教育では知名度の高い超大家だったのですが、当時の学生はそうした先生の活躍を余り知らなかったし、古風とも感じて居たのでしょうね。歴史社会学派のような魅力を感じないせいか受講者が少なかった。先生も「学生が集まらないね」と心配されておられました。ある時私一人で授業を受けたことがあるんです。先生もさすがに困られたらしい。講義する意欲を失われたのでしょうか、「これでは授業になりませんね。あとで家へ遊びに来いよ」と言って打切られたことが、強い印象となって今に残っております。それが御縁で二、三度お宅へ伺ったことがあります。一度は奥さんの取次が「川瀬」と間違えたらしく、応接間へ入って来られた先生の顔に、失望の色が浮かばれたのを察知しました。出迎えたのが知名の学者川瀬一馬氏でなく、出来そこないの教児だったのだから当然でしょう。

それから風巻景次郎先生も見えていたんです。この先生がまたおもしろくて、考古学の話を中心になさるんです。珍しい話をして下さ

る方だったんです。教壇の端から端を行ったり来たり、まるで動物園の熊のように歩き廻りながら、土器や石器の話をまくし立てるのです。黒板に図解もされながら。文学史の大家がこういうことなされたのです。敗戦までの皇国史観ではタブーだった考古学が神代に代って論じられたのですから、すごく新鮮でした。風巻先生の著書では一九年印刷の『日本文学史の構想』が手元に残っています。

大体、国文の先生として私の印象に残っておりますのは、その四人なんです。私は病気で二年の終りの頃から、あまり学校には出られなかったものですから記憶も薄れているんですけどもね。それから先ほど申し上げましたように、永積先生が二十二年に迎えられ、だんだん充実して来たわけです。それから長澤先生がいらっしゃっていらしいんですけども、直接漢文関係は教わらなかったんですね。

その他の関係で言いますと、英文学は本多顕彰先生に教わりました。本多先生は、普通の講義はボソボソと小さい声でなさっていたんです。ところが書いた物を見ると非常に激しい口調で書いているものですから、相当恰幅のいい豪放な先生かなと思っていたんですが、授業は非常に静かだったんです。読んだ時と直接会った時の印象が非常に違う先生だな、と思いました。同じく英語で桂田利吉先生にも教わりました。この時僕が代表して、あまりいい本もないものですから教科書をどうしようかという相談をして、先生が持っておられた本の一部分を、タイプ印刷にして、薄っぺらなテキストに仕立てて授業をなんとかやっていた、というような時期です。入江直祐先生にも教わりました。「辞書は片手でパツと引けなければ」

が持論で、参りました。第二外国語のドイツ語、フランス語には全然ついて行けませんでした。

それから、まだ印象にあるのは、哲学関係の先生なんですけれども有名な方で出隆先生ですね。この頃非常に哲学・思想関係の学生から憧れられていた先生らしいんです。『哲学以前』は必読の書でした。それからもう一人、金子武蔵先生……。

——ヘーゲル研究家の金子さんですね。

川村 ええ。この方にも教わったんです。お二人共すごく偉い先生なんですけれども、その頃は兵隊さんのおさがりみたいな服装で、ドタ靴をはいて、なんていいいますかズックの鞆みたいなナップサックですか昔の軍隊の背囊の下へさげたようなものに本を入れてきていらっしゃる、というような状態でした。風巻さんもリュックサックを背負いまして、どこかからの買い出しの帰りでしょう、それを脇へ置いて講義をしたという時代なんです。ですから、あの頃食うや食わずで、そのために生活と勉強を兼ね合わせるということ是非常に大変なことだったわけです。

哲学では、あと谷川徹三先生とか池島重信先生、そういう先生方にも教わりました。谷川先生は歩きながらノートなしで講義されるのに対して、池島先生は腰掛けてゆっくりとノートを読んでゆくというタイプでした。心理学ではゲシュタルトということでレポートを書けというけれど、あまり授業には出なかったのがゲシュタルトとは一体なんだかわからないで滝瀬君と相談しながらレポートを書いた記憶がありますが、今考えてみますと千輪浩先生ですか、そういう授業もありました。

当時は、さっきも言いましたように食糧難の時代で、私もそんなんですが仲間を見ますと毎日来るのが大変で、青い顔をしてフラフラしていました、あいつ大丈夫かななどと心配し合ったような状態で学校へ来ているんです。大体そんな時期に私は勉強していたんですね。

——テキストはほとんどなかったと思うんですが……。

川村 だから、これを買えという指示もない。殆んど先生の口述をノートするだけでした。

——正木先生もおっしゃったんですが、その時なにかをやるという場合に本探しから始まるわけですけども、うまくゼミなどは運営できましたか？

川村 そうね、うまくいったとは言えませんが。片岡ゼミについては先程も一寸ふれましたが、年度始めに大体の方針が示され、学生が各々作家別に分担しました。だから本や資料も各自思い思いに探して何とかまとめるという状態でした。誰が何を読んでもるか等の情報交換は余りなかった。従って同じ土俵で論戦したり批評したりという事が低調で、先生の講議に待つ傾向が多かったですね。但し小田切さんのものなどはよく読んでる者が多かったから、先述のようにこっぴどくやられる事もありました。

### 戦後の文学との関わり

——昭和二〇年代の前半ですが、その頃太宰治、坂口安吾、石川淳など、いわゆる新戯作派の人達が出る。戦後文学者も続々と登場し、旧文壇の文学者も復活してくる。それから「人間」など、いろ

いろな雑誌が出てきますね。今話していただいたのは主に授業や研究のほうの分野ですが、一般の文学状況をどう御覧になっていましたか？

川村 あまり読めなかったですね。太宰なら太宰を全部読むということは、ほとんどできなかった。しかしそれは私が不勉強のためで読んでも人も多かったでしょうね。

——先生は卒業されて、すぐ就職なさいましたか？

正木 私は卒業前なんです、就職したのは。これまた、ちょっと特殊なケースですけど、その前に今のテキストの問題で言いますと、あるいは私よりも川村さんの時のほうがもっと厳しかったかもしれないね。

川村 とにかく、ないんだものね。

正木 すべての統制でね。私の時にも紙の統制で出版は限定されていたけれども、それ以前に出版されたものは古本屋へ行けば、思想的な本を除いて、日本文学関係だとテキストとしてある程度手に入ったんです。おそらく川村さんの時期には、それすらもむずかしかったんじゃないかと思えますね。

川村 ええ、ほとんど指示しませんでしたからね、テキストを。大学には一切テキストというものはないのだと感じていましたね。

正木 それで、川村さんのお話をうかがっているが私もし文系以外のことをお話ししたかったんですけど、たとえば哲学だと谷川先生が田辺元の『哲学通論』をテキストにしてやられた。同じ谷川先生が、アランの『芸術論』をテキストにして芸術論の講義をやりました。

——それは桑原さんの訳じゃなくて……。

正木 ええ、あの前です。なんて言いましたか……ちょっと訳者は忘れましたが、桑原さんじゃないです。非常にあれも難解でした。あと西洋思想史では林達夫さんですね。田中美知太郎さんの授業もありました。それぞれに、なかなかおもしろい話でね。それからもう一つ、富成先生が日本科学史という講義をやりました。あとで知ったんですが、すごい先生だなと思いましたね。そうして教わった先生というのを思い出してみると、戦後になってもものが自由に言える、みんなが本当のことを言い出した、そういうような内容のことをあの戦争中に言っておられたんですね。私はこれは、そういう意味では非常に幸せだったな、と考えています。

それから、堀江さんが先ほどお訊きになった敗戦後の文学状況のことですが、とにかく紙の統制で出版される本が非常に少なかったんです。ですから、新しいものが出ると、本当に飛びついて読んだりしましたね。出るとすぐ飛びついて読めるほどに、給料も安かったけれど出るものも少なかったということでしょうね。

——たしか雑誌で「思潮」という題だったと思うけれども、文学雑誌じゃないんだけど窪川鶴次郎さんが編集をやって、いろいろ日本の思想や文学の問題も含めて——あれは二号ぐらいで潰れちゃったんじゃないかと思うんですが、大変おもしろい、いい雑誌が出ましたね。

正木 あれにたしか、石母田さんが「英雄時代」というのを書いてたんですね。

——あれは「史論」ですね。

正木 いや、「思潮」じゃなかった？

——ああ、そうか、「思潮」か。だけど、いま私が言ったものは違うものらしいですね。それから新日本文学会は昭和二〇年の暮あたりから、宮本百合子の「歌声よ、起これ」が載った創刊準備号が出て、それから創刊号がたしか一二月……

——翌年発刊ですね。

——翌年でしたかね。あの頃は食料事情は窮迫していましたけれども、そういう面では、ばかに潑刺とした時期でしたね。それから古典のほうのテキストでいうと、講談社が校註国文叢書という——あれは終りまで全部は出なかったようですけども、非常に紙の悪いのが出ましたね。あれなどは、もう在学中にご覧になりましたか？

川村 いや、不勉強で見ないです。授業には古文は全然ないんですよ。近藤さんも大体、近松とか西鶴で、それ以前はないんです。

——朝日古典も、これも紙の悪いのがあっても、まだ出始めていないのかしら？

川村 ええ、やっと出始めたころですね。僕の卒論は万葉でしたが、朝日古典の万葉は二十二年の十二月に第一巻、第二巻は二十五年、第五巻が三十年です。ほとんど手にすることが出来なかった。

——そうすると、やはり戦前に出た本を使うほかなかったんですね。

川村 ええ。それも古本屋で探すわけですけど、やはり焼けてしまったんでしょう。あまりないんです。

正木 それと、本を買うのに交換でなきゃ売らなかったんですね。

### 学生の動向と状況

——鈴木さん、卒業は一九五二年ですから、昭和二十三、四年の頃入学——この頃も日本共産党の五〇年分裂から血のメーデー事件など、外は相当荒れていたと思うのですが。

鈴木 わたくしは、昭和二十二年から二十五年の三月までは夜学にいましたから、昼間の学部の様子は、よくわからないんです。ただ、当時は、学生運動が非常に盛んでした。杉本先生はわたしより三年ぐらいあとですか。

——私は入学したのが二十七年ですから、ちょっとあとですね。大学院で少し重なったという……。

鈴木 そうでしたか。……なにしろ非常に学生運動が盛んでしたね。労働界でも二・一ゼネストで、伊井弥四郎という法政の卒業生が活躍しましたね。

——法政の卒業生ですか、あの人は。

鈴木 ええ。たしか、専門部の法律学科だそうですね。あの頃は、学生運動の高揚期で、全学連という組織ができて、ぼくらも法政の旗を持って日比谷公園へ行ったり、有名な東宝争議に応援に行ったりしましたね。ただし、今の学生運動とは運動理論も運動の方法もずいぶん違うものであったと思います。

自治会ができ、ぼくもその執行委員をさせられて、ワイワイ騒いでいました。その頃は昼間部も夜間部も自治会は一緒だったんで

す。そして、法政大学全学自治会議というのがありまして、それには予科も工学部も、津田沼工専のほうからの代表も来て、オール法政の自治会議をやったんです。学内民主化ということを取り上げて、全員がそのことをまともに考えていたと思いますね。思い出は美しく彩られるということになるかもしれませんが、ぼくはたいへん肯定的な評価をしているんです。

高等師範部には近藤先生がいらっちゃっていました。

——西尾先生は来ませんでしたか？

鈴木 高等師範にはみえていませんでした。

——重友先生は？

鈴木 重友先生は二部の学部のほうへお出になっていたようですよ。

——高等師範と二部の学部とは別なんですか？

鈴木 別です。高等師範というのは、旧制の専門学校です。ちょっとややこしいんですけど、当時は、たしか一部にも二部にも旧制学部と新制の学部とがあって、それが学制の切り換えで、第一文学部と第二文学部とになって行ったと思います。重友先生には大学院の修士課程に入ってから教わりました。当時は、武蔵大学と兼任でいらっちゃったようです。大学院では『猿蓑』のゼミをしていただき、ずいぶん鍛えられました。

高等師範部のスタッフは近藤先生、それから几帳面によく出て来られた長澤先生は必ず出席をとりました。ぼくもその影響で学生の出席をとるんですよ。（笑）それから、漢文の市川先生、ここにお見えの正木先生、いちばん人気のあった小田切先生、そして亡くな

られた小原元先生などでした。もちろん、高等師範ですから一般教養的な、つまり文学関係以外の先生がたもいらっしやったんですけれども、国文関係ではそういう方々だったと思います。当時、キャンパスにあった建物は、古い図書館のビルと六角校舎と、それと新館と称する建物が端のほうにありましたね。

川村 ああ、あれがありました。

鈴木 その間に、現在、守衛さんがいるあたりからこっちのほうに向かって木造の二階建ての建物がありました。下が事務処理をする所で、授業料を納めたりなんかしました。まあ、そんな程度の建物だったと記憶しています。それでも学生たちは、本当に新鮮な気持ちでしたね。ああ、こういう勉強する世界があるんだ、という感じがあったと思います。まるで活字とは縁のない今日死ぬか、明日死ぬかという中からとにかく学園に帰って来られたということは、めったに使う言葉ではないと思うけど、まさに感動的な日々であったと思います。

ですから先生方のお話も、あたかも海綿が水を吸うように、吸収しました。高等師範部に来ている人は割合に教員をしている人が多かったんです。したがって、勉強をしたいという意欲はかなり旺盛だったと思います。

正木 ありましたね。

鈴木 というのは、物はないし、もちろんテレビなんかもなかったし、それから今まで抑圧されていて、文化的なものはすっかりもぎ取られた状態だったため、猛烈といってよいほど知的な欲求があったと思います。たとえば、こんな例を思い出します。初めて岩波

が哲学辞典を売り出した時、神保町から九段下辺りまで学生が並びましたからね、それも朝早くから。また、当時は、「リーダーズ・ダイジェスト」をみんな読みたくて読みたくてね。グローバルなホット・ニュースが入っていましたからね。あれは欲しかったんですよ。紀伊国屋に買いに行くんですが、朝早くから、紀伊国屋の前から万世橋行き都電の発着のあたりまで、ときによっては、ずうっと先の角筈のほうまで行列が続いたものです。そういう行列についても、部数が決まっているとみえて、なかなか買えなかったですよ。今は本があり過ぎて、まるで本の洪水に押し流されそうな気がしますけれども、その当時は本当に本が少なかったですね。義務教育の学校でも、新聞紙を四つ折にしたような教科書、あるいは墨塗り教科書を使っていた時代ですから……。とにかく、せっせと古本屋歩きはいたしました。

お堀のむこう、今の理科大の裏のほうに、今はないんですけど大橋図書館がありましたね。特に文科系の本はわりあい揃っていました。ぼくは、卒論を書く時なんか、コッペパンをかじりながら大橋図書館へ日参しましたよ。今はどうなったんでしょうかね……。

正木 僕が行ったことないな。どこか別の所へ……。

鈴木 今は二部の学生も八〇パーセントぐらいは職を持っている学生です。みんな転部試験を受けたがっている人ばかりなんだけれども、当時はそんな人はめったにいません。みんな働いていたんですが、勉強意欲はたいへん旺盛だったと思いますね。それにサークル活動も非常に盛んでした。たとえば、灯心会という名の会がありました。今でいえばサークル活動だったんです。昭和二〇年代の

初めですから、もう三〇年以上前になりますが、その頃の友情の絆が未だに続いていて、時々集まるんです。

話が非常に飛躍するけれども、私が学部を出た頃の昭和二十七、八年ごろというのは、わりあい大学の教員になった人が大勢いるように思えます。もちろん、大学の教員になることだけが目的ではありませんが、法政の卒業生にも、研究者として頑張っている人たちがたくさんいるというのも、いいことだと思います。学内ではここにいらっしゃる杉本さんとか駒尺喜美さんがそうです。外部では、東京経済大学の阪下圭八さん、大阪音大の田中喜一さん、昭和音大の伊藤敬一さん、大学院は都立大だと思いますが、神戸大学の相馬庸郎さん、国立音大の荒川有史さん、北海道の藤女子大(?)の橋本稔さん、国際短大の下沢勝井さんなど、わたしの知っている範囲でもこれだけの方がいます。

——伊井弥四郎が法政の出身だというのは、今日初めて聞きました。私は二・一ストの頃は盛んに動いていまして、あの二月一日の前の夜、組合の事務所へ泊まりこんでいて、あの放送を聞いて涙を流した一人ですけどね。あの時は伊井さんが法政の人だとは全然——もちろん、その頃は僕は法政に縁もゆかりも、まだなかった頃ですけど、知らなかったですね。

川村 国鉄から来た人でしょう、涙をのんで……。

——あれは二十二年の二月一日ですね。

鈴木 だから一月三十一日ですね。二月一日にゼネストをやるのを、前の晩に中止指令が出た。

正木 そうそう、一月三十一日だ。

#### 「誌要」再刊まで

鈴木 ぼくは、あの頃、田舎で労働組合運動をやっていました。ゼネラルストライキということで、国鉄も、東京の闘争に行くんだったらタダでいいから乗れというわけです。タダで東海道線に乗って、握り飯を持って東京までやってきたんですよ。

話を大学のほうへ戻しましょう。多分、昭和二十七年、八年ごろだったと思いますが、「法政文学」という雑誌が発刊され始めました。

——それは、編集とか刊行は、どこが主体になっていたんですか？

鈴木 これは、いうなれば「早稻田文学」や「三田文学」の向こうを張って、法政出身の作家で芥川賞を貰った倉光俊夫さんとか寒川光太郎さんなどに続こう——という意気込みで始めたわけです。直接力を入れてくれたかたは、詩人の藤原定先生や英文科出身の作家森田雄蔵さん、雑誌「法政」の編集室にいらっしゃった郡山さんなどでした。この雑誌は学部を問わず創作に興味がある者たちを統合して始まったわけです。

川村 その記録がこの『百年史』にありますね。藤原定は第二教養部の教授で、二十八年と三十二年に復刻しているんですね。一三号に及んだ、と書いてありますが、お持ちになっているのは何号ですか？

鈴木 今日、持ってきているのは四号です。

——いま始まる前に堀江さんと話していた時に、「国文学誌要」

の最終号が戦前で、それから一九五七年、昭和三十二年に復刊の第一号が出ているわけですね。その間、国文学会として何かを出すということは……。

川村 僕らの時には、さっき言いましたように片岡先生・西尾先生……。

鈴木 そうそう、片岡先生はいらっしゃいました。西尾先生はどうか他の……。

川村 まだ東京女子大ですか。

鈴木 ええ。とにかく六角校舎の国文研究室の中に、そういう研究誌を編むという帰属点がなかったのではないですか？ 小原先生が助手になられたのは二十五、六年ぐらいでしょうか。

——そのあと丹慶さんが……。

鈴木 丹慶さんは、もつとあとですね。

——あの人は、この雑誌を編集して……。

鈴木 ええ。つまりね、当時雑誌までは出なかったけれど、小原先生に協力して名簿づくりをやりました。また、ささやかではあったが、発表会などの研究活動もしていたと思います。

——国文学会としての、いろんな活動はあったわけですか？

川村 いや、国文学会というのは実動してなかったんじゃないでしょうか。僕らはあまり聞かなかった。「誌要」というのがあったこと、復刊したいということは近藤先生が言っていました。

鈴木 国文学会と銘うった組織的な動きはなかったけど、自主的な研究活動はいくつかあったのではないかと記憶しています。たとえば、この「日本文学研究」ですね。これを編んだのは市岡卓美と

いう人で、これが出たのは昭和二十五年なんです。こういうものを、いわば「日本文学誌要」に代わるものとして、学生が自主的に発行していたわけです。

——ああ、それも学生が自主的にやっていたんですか。

鈴木 市岡卓美という人は、現在、NHKにいるはずですが。NHKに入って間もなく、例の砂川事件で放送記者としてたいへん活躍したジャーナリストです。その市岡さんあたりが中心になって作っていたようです。

——何号ぐらい出たんです？

鈴木 いや、それがね、はっきりしないんです。この号は、五年の一月二十五日の発行で、もう二巻になっていますけど……、そのあとは……。

——第二巻ですか。

鈴木 とにかく、当時は、物はないけれども、学生が本当に手造りでやったものでした。

——謄写印刷かなんかですか、活版ですか？

鈴木 もちろんガリ版です。活版なんて、とてもとても。そういう時代じゃないんです。紙だって、なかなか手に入らない状態でしたから。

——正木先生のところには、それはないんですか？

正木 ないんですね。これのどの号かはあると思いますが……。

鈴木 これが、いわば「日本文学誌要」の、前身の役割をしたともいえるでしょう。

川村 日文協の法政支部というのがあつたのね。



——ああ法政支部があったんですか。

川村 ええ。それから、さっきの「誌要」がなぜ出なかったかということですが、国文学会というのがはっきりしてなくて、おそらく予算が全然ない。僕らは会費を取られた記憶もないし、全然お金がないので発刊できなかったんじゃないでしょうか。それからスタッフ、仕事をする人もいなかった、ということじゃないでしょうかね。同期の滝瀬君の話によると、国文学会の再建と、「日本文学誌要」の復刊を切望されていた近藤先生が、しびれを切らして、昭和二十五年頃助手だった小原さんと研究生だった滝瀬君、鈴木仙三さん等にハッパをかけ、二十六年一月には国文学会が復興し、第一回の研究発表会が実施され滝瀬君も「伊勢物語論」を発表したとのこと。それから後学生も増加し会費もプールされるようになり、スタッフの努力で三十二年には念願の「日本文学誌要」も復刊にこぎつけることが出来たようです。正木さんがいた最初の頃は国文学会があったんですか？

正木 国文学会は、戦前はありませんでしたけれども……。

川村 雑誌を出したりなんかやっていたけれども、戦争が始まる頃は、もう出来なくなっていたという……。

正木 そうですね。「国文学誌要」は大体昭和一二年で終わっちゃって、そのあと日文だけじゃなくて学外の学者・文化人を集めた「文芸復興」という雑誌を何回か出している。これも、わずかの号で潰れちゃいましたね。だから手をかえ品をかえ、戦争への抵抗をずっと試みてきたという歴史はありましたけれどね。

川村 さっき西尾さんの話が出てきましたけれど、たしか西尾さ

んが法政へいらした時だと思うんですが、要するにわれわれに号令がかかるんですね。あれは、どこへ集まっていたか、それがはっきり記憶にないんですが、組織を変えするというわけですよ。あれは何年頃だったかな？ たしか二十何年かですよ。そのあと、今までの文学部のいろいろな科が日文と……。

正木 それは昭和二三、四年ですね。

川村 一〇年代ですか？ その頃も西尾さんは来てたの？

正木 ええ、いらしたと思います。

川村 そんなに前ですか。私は戦後だと思っていたんだけども……。

正木 いや、戦前ですよ。これは大学全体を軍国主義的な方向へ再組織していく中で、文学部は潰そうとかかるわけです。それに抵抗して城戸幡太郎さんとか松本潤一郎さんとかが、文学部を再組織しようと……。

川村 当時、松本さんが文学部長で……。

正木 ええ。そういう方々の中で文学部の再組織をやるということとで、文学部の学生もある程度確保し、そして文学部そのものを存続させようという、非常にむずかしいファシズム経営との対決ですね。それが、あの頃にあるわけです。そして文学部を潰そうとして学生募集を停止したんです、大学側が。ところが、一〇名前後の予科から学部へ来る学生達がそれを承知しなかった。それとうまく合って、文学部再編案がどうやら実るんです。そして文政学科と文芸学科に分れるわけです。私は、その文芸学科の卒業なんです。文政学科というのは文化政策学科の意味なんだそうですが、それ以前の

哲学科・心理学科・社会学科を併せたものですね。あとの国文・英文・仏文・独文を併せたのが文芸学科で、その中の国文専攻とか英文専攻となるわけです。そういう形に、太平洋戦争直前に編成替えになるんです。

**川村** 正木さんの頃、まだ法文学部といていたんですよ。私等も法文学部として入ったのでした。

**正木** そうです。

**川村** 戦後、文学部に独立したわけですね。

**正木** それが、これを見ますと二十二年ぐらいらしいですね。その時に二部の文学部もできるわけです。そして、そこで夜の高等師範部が学生募集を停止するんです。たしか鈴木さんのあとというのは、高等師範はいないんじゃない？ その時に在学していた学生だけ残る。そうすると鈴木さんはあの時二年だったから、二年、三年と二年間は高等師範部は残っていたけれども、新入生を入れない。新入生の分というのは第二文学部のほうへ入っちゃう。そして鈴木さんたちが卒業したんで、全部が第二文学部になっちゃうということになるんですね。

**川村** 僕らの頃は、まだ国文科は昼間しかなかった。少し経ってから二部ができたんですね。

**鈴木** それで、先ほど問題として残したことがだいぶケリがついて来たと思います。一つは、そういう学会誌を編むエネルギーの不足、それから帰属点がまだ充分に整っていなかったこと、さらに、経済的な裏付けもなかった、などということになるようですね。だから研究室へ行くのも部屋があるから集まるだけでね。それで、そ

れに対する先史的なものといっているいいものが、さっき僕が言った「日本文学研究」というガリ版刷りの手造り雑誌となると思います。

**川村** それは学生が作ったものですね。

**鈴木** そうです。それから総合雑誌的な「探究」という雑誌が出ていましたね。正木先生はご存知だと思っんですけど……。

**正木** ええ。

**川村** 「探究」は高崎隆治、西川清治、滝瀬爵克君達が同人だったようですね。

**鈴木** おそらく図書館に保存されていると思うんですが、この「探究」という雑誌は、はじめ、いま二教にいらっしゃる西川清治先生、それから野中房雄さんや森太刀雄さんたちが、中心になって発行したものだそうです。

前に話題に上った「法政文学」ほど上等なものではなかったけれども、高等師範部でも、「出発」という同人雑誌があったんです。それは、主に創作や評論が中心の雑誌でした。

—— 大体、この復刊が出た頃に、やはり学会費の徴収を始めたんですね、代理徴収という。

**鈴木** お金の問題もありますね。

**川村** それで、僕らの頃は全然なかったようですが、二十六年頃から会費の徴収が考えられたのではないしょうか。

—— 資金がなければそういう活動はできないですからね。

**鈴木** しかし、小原先生のお手伝いで国文学会を作るための名簿作りを何回やったかわからないですよ。ここに五種類くらい持ってきましたけれど、せっせと名簿作りをやったり、集まりもよくやつ

たりしました。

**正木** そうですね。それは鈴木さんが本当に骨を折ったんです。まあ、彼は小原先生を前に立てて言っているけど、あの時は鈴木さんが本当に駆けずり廻ってやりましたよ。そして、その復刊にこぎつけたのも鈴木さんの時ですね。

**鈴木** いえいえ、ぼくは何も……。

**川村** 日文協との関係は、支部ができていたんだから深かったはずですね。僕も例会に出たけど、益田勝実さんとか難波さんとかがケンケンガクガクでやりましたよ。大体、夜ですけど、多分毎月例会をやっていましたね。

**鈴木** これは昭和二十二年の「新日本文学」ですけど、当時、「新日本文学」はよく読まれていたと思います。それから「日本文学」もよく読まれていました。——珍しいと思って創刊号を持ってきました。——その頃、法政の学生は日文協の学生会員の主力メンバーとして活躍していたように思います。

### 学問ということ

——まあ、ここで基本的な線は大体通りましたので、あとはそれに派生して出てくることを少し……。

**川村** とにかく、そういう苦しい時代で学校に来ようという意欲は強かったですね。しかも真面目に先生の講義を聞いてテストでいい点数をとるというんじゃないくて、法政はもっと違うでしょう、自由にやりたいことをやれと。人数も少なかったし本もなかったし大変だったけれども、そういう苦しい中で一生懸命やってきて、あと

で発展する。在校中は、あまり成果を挙げられなかったかも知れないけれど、卒業してからかなりの成果を挙げているという人が出てきていると思うんです。

**正木** 私は中学・高校の生徒を見ますが、たしかにガリ勉をやっているのは駄目ですね。高校ではいい成績で、大学へ来てからかえって落っこちている。そういう点があるんですけども、私が大学で近藤先生に叩き込まれたのは、学問と人間ということね。本当の学問をやらなきゃ、人間的に成長しない。当時「軍国主義のほうにべったりくっついてる人達の学問は本当の学問と言えるか」と、しょっちゅう言われましたね。特に戦後になってガラッと変って、今まで軍国主義のお先棒を担いでいた人達が、私はもともと民主主義者だったんだというのがありましたけれど、これは何事だということですね。これは近藤先生だから言えるのかも知れないけれど、そういう点で私は中学・高校の生徒にも言うんです。勉強ができなくても人間さえよければというのは、やはり間違った教育だと思いませんか。本当に人間がいたためには勉強もしなくちゃいけない。今のような試験制度の中でできるできないは別として、そういう学問と人間との統一をやらなきゃいけないということを、近藤先生から叩き込まれたんですね。

まあ、余談から余談に飛んでしまいうんですけども、私の同級生は前後を見ますと非常に人数が多かった。私の一年下はもっと多くなった。多いといっても五、六人なんですよ。その中に変わり種がいまして、一人は、これはあまり身体的なことを言っちゃ気の毒なんだけれども、本当に背の低い人でね。予科の時に級長が起立の号令

をかけると、先生がおまえはなんで立たないんだというと、はい、立ってます、と答えたなんていうエピソードが伝わっていました。

これは広島出身で、一年経ったあとで、お父さんが郵便局長なんです。が歳取ったからその跡を継がなきゃならないというんで退学していった人なんです。広島でおそらく原爆の時にやられているだろうと思うんですが、それを僕は広島に行くたびに探したいんだけど、わからない。もう一人は独学で専検——当時の専門学校卒業検定試験を取った人で、これは日本文学の古典から現代まで全部覚えているんです。ところが、機械的のものを知っているだけじゃ何にもならないと悟って法政へ来たという、そういう変り種がいました。これがまた、どうなったのかわからない。もっとも彼は正式に入ったんじゃないくて、選科生という形だった……。

川村 選科があったんですか。

正木 ええ、あったんです。

——おもしろい話、小見出しで言えば「文学・人間・学問」ぐらいになるようなお話を、つづけて御三方にしていただけなら、と思います。

川村 いま正木さんがおっしゃったように、ただ百科事典的に頭の中に入れておくだけじゃなくて——まあ、入れることも大事ですよ。今の学生はあまり入れないで困っちゃうんですが、入れることは基礎として大事で、それをどう利用するかですね。それを組み合わせたりなんかして、たとえば論文が生れてくるわけでしょう。自分で何かを発見する、そういう応用力は、あまり生真面目にやっている人には案外ないんだ。それをどうするかが、教育としては大事じゃな

いかと思いますね。僕の場合、そういう点は遅ればせながら、法政で教わったと思うんです。師範学校の時には固いんで、真面目に覚え込むことだけは一生懸命やりましたけれども、そういう両面が必要ですね。学校時代は生真面目にやることも、いい点数をとることもいいけれど、卒業してからのほうが人生長いんだから、その中で覚えたことをどう利用して発展させるかを自分で考えていく意欲、それを育てることが大事じゃないかと思うんですよ。

正木 もう一つは、学問というのは断片的な知識を詰め込むのではなくて、むしろそれは辞書を引きゃわかること、他の人の研究書で読めばわかることなのですが、それをどう組み立てていくかが問題でしょう。

川村 そう。組み立てるには、何か問題意識とかテーマを持つことでしょ。そのテーマに合わせて資料を探してくる、これは大事だろうと思いますね。

正木 鈴木さんにまた喋ってもらいけれども、それが今のところ、たとえば自然科学のほうで原子物理学の発達で原子爆弾・核兵器を作り出しちゃった。これは、そういう知識の組み立て方の問題、それをどう使うかの問題、どういう状態の下でどういうものを作っていくかの問題、そこでの総合的な見方がないところから出てくるわけでしょう。

日本文学の『万葉集』にしても、戦争中は軍国主義に利用されていた。ところが、その東歌にしろ防人歌にしろ、決してそうじゃないものがあるわけですよ。それが全部切り落とされてしまった。むしろ権力に対する抵抗があったわけです、防人歌には。その側面を

見落してはいけないうちと思ひますね。そういう意味での総合的な見方が必要でしょうね。

川村 僕は卒論に『万葉集』を書いたんだけどね。戦争中やはり僕らは「醜の御楯と出立つ我は」式で育っちゃったでしょう。まず、それが利用された。ああいうのは、一つか二つしかないんですね。ところがあれも、ああいう防人軍国の場にあったから外からの制約で詠んだのか、本心から詠んだのかは問題なんです。気がねしてああいうように詠まされたんじゃないか、という気がする。「ふたはがみ悪しけ人なりあたゆまちわがする時に防人にさす」という、自分が具合悪い時に無理矢理に防人に引っぱり出された、と恨んでいる歌もあるわけです。そういう点で『万葉集』を一方的に見ちゃいけないということを書いたんですよ。今でも、たとえば柿本人麿を代表させて万葉集は男性的だという一方でやっていますけれど、決してそうじゃない。家持のすぐくデリケートで女性的な近代的な面を見れば、非常に複雑なんで、あまり一本調子で割り切っちゃ駄目なんじゃないかと考えます。もっと視野を広く見ようということですね。

### さまざまな講義

——鈴木先生は卒論は何を、どなたにお出しになったんですか？

鈴木 ぼくは学部の際は鷗外の歴史小説をやって、片岡先生に見ていただいたんです。

——片岡先生は、その頃はまだお元気で……。

鈴木 ええ、お元気でした。ぼくが修士課程に入ったのは卒業した

年の昭和二十七年ですから、その時は、まだお元気で講義をなさっていました。大学院に入ってから、たしか、二、三年間講義を聞かせていただきました。

——ああ、そうですね。小田切先生はたしか、私が入学した二十七年の秋から講義をなさったんですね。それまで病気で休んでおられて……。

鈴木 その前に高等師範でなさっておられたんです。

——小田切先生がですか？

鈴木 その後、病気で休まれたのではないのでしょうか？

——何年くらいですか？

鈴木 その前は知りませんが、僕が高等師範にいる頃の昭和二十二、三年です。名講義をなさる、というので、ぼくは自分の授業をさぼって聞きました。つまり、盗聴です。しかし、そういう学生がたいへん多くて、窓のところに腰かけたりして聞いたほどの盛況(?)でした。隣の嘉悦学園の木造校舎でした。小田切先生が、新進の文芸評論家として彗星のように出てきた時期ですね。学生のほうも、先生の講義を夢中になって聞いたものでした。

川村 その当時、自分の専門の学科以外の講義に入っちゃいけないんですか？

鈴木 はい、建て前はそうですけれども、その辺は適当でしたね。ほかの先生の講義を聞くことはもとより早稲田や慶応や東大にも、いい講義があると盗聴にきましたよ。当時はみんな詰襟を着てましたから、念のためにバッヂだけ外してね。(笑) 夏なんかはワイシャツだけです。から気楽なものでした。ぼくらは文法を知らな

かったので、自主講座を開いて特別に正木先生にやっていただいたことがありますね。

**正木** ああ、そういえばありましたね、そういうことが。

**鈴木** あの時のご無理を申し上げまして、どうも……。 (笑)

**川村** 先生がよくて講義を聞く学生が多いという場合はいいんですけれども、普段の講義では何人もいないことがよくあった。パラパラとしかね。ところが試験になると一遍に出てきて、こんなにしたのかということがありましたね。

**正木** 私の時に、国文関係ではないんだけど、ご自分の著書を読んでいらっしゃる方があったんです。だから、あの本を買えばよかろうというんで、その次から出ないことにしちゃったんです。そうしたらね、その次から著書に書いてないことを講義に取りあげてね。 (笑) しょうがないから、友達のノートを借りてレポートを書いたことがありました。

もう一つは、久松先生が『日本文学評論史』という大冊を出していらっしゃいまして、僕の時の講義は歌論史なんです。毎回、このくらいの原稿を持ってこられて、その原稿を見ながらベラベラベラツと。そのあと天井を見てベラベラベラ。決して学生のほうを見ないんですよ。どうしてかなと思っていたんですが、僕は教師になっからわかったんです。居眠りしてるのがいるから癪にさわるんですね。 (笑) そこで原稿と天井しか見ない。ところが、その原稿が、その次の『日本歌論史』になるんですね。こんな大著ですが、その原稿をもとにして一年間講義していらしたんです。

**鈴木** 講義ノートといえば、片岡先生は飯田橋から法政へくるま

でに喘息のために一〇回ぐらい休憩するんです。それでも講義になると、俄然、キリッと引き締まりました。しかも講義ノートを必ず作ってきましたね。ぼくなんか、時々、忙しい時には、手持ちで喋っているときに、ああ、片岡先生は、毎時間必ず講義ノートを作っていたらよかったのになあ——とうしろめたく思います。

したがって、片岡先生は、真剣に講義を聞かないと、本当に怒りましたね。

あるとき、一人の女子学生がゼミでみんなからさんざん批判されたために泣いたんです。そうしたら片岡先生は唇をワナワナとふるわせて怒り、「君、ゼミで泣くとは何です。出て行きたまえ」と。もう顔を真っ青にして怒りましたね。学問の厳しさだなあ、と思いましたね。僕が怒られたのは、大学院の時です。みんなにおだてられて、片岡先生に文学史をやってもらう交渉にいかせられたのです。そこで仕方なく、片岡先生に「文学史の講義をやっていただけませんか？」と申しあげたのです。すると、先生は体をふるわせて怒りましてね、「君、何を言うんです。文学史なんか、大学院へきた人間は自分で勉強すべきものです。つまらんことを言うてくるんじゃない」と。僕はほうほうの体で帰ってきました。厳しい先生でした。そういう意味では、性格は近藤先生と対照的なところがありましたね。

でも、片岡先生はまた、下らないことは本当に下らないと割り切る。僕は、貧乏で金がありませんから奨学資金を貰おうと思いましたが、片岡先生に推薦状をいただきにいったんです。その用紙に指導教授の所見を書くところがあるんですね。その時、先生は、にこに

こなさりながら、「所見は君が書くほうがうまいんだから、自分で書きなさい。育英会の本部では書体なんかわからないから。ハンコだけ貸すよ」と言って、ハンコを授けてくれたんです。一方では、そういうところがあつたんですね。そして「できるだけ貰えるように、係りに話しておいてあげましょう」と、言ってくださいました。今でも、ありがたいと思っています。

川村 僕も叱られたことがありますね。ちょっとしたレポートで、人間の性格ということを書いたんです。性格によっていろんなことが違ってくると思うたら、怒られちゃった。先生は性格よりも、もっと社会の影響によって人間が変革され人格が形成されるという考え方でしよう、片岡先生は。意志の強い人と弱い人がいるとか、そういうことを書いたら、「意志が強そうだって、社会から圧迫されると弱くなっちゃうんだ」と言うんですね。社会改革が大事だという片岡先生の考え方は、厳しかったね。

——私は昭和二十七年の入学で二部のほうなんですけれども、その年の夏休みに夏期講座というものをやりましたね。そういうことは、その前にもあつたんでしょうか。近藤先生が『心中天網島』を読まれて、それから西郷先生が『源氏物語』の「夕顔」をたしか読まれたんですね。二週間ぐらい連続で、非常に細かく丹念に注釈しながら講義されたんです。私は実際の近藤先生の講義は、それがあとにも先にも初めてで、あとは教室ではいろいろ勉強の方法についてお話を聞きましたけれども……。

鈴木 「今日は大切な話をします」と言いながら、マッチを小さく折るんですね。

——そうですね。ですけれども非常に詳しく、どこでどういう感動を受けるかという話を先生がなさったんですね。ああいうことは、そのあと私はないんです。

川村 長時間の講義はなかったですね。研究室の座談では含蓄のある寸言を多く聞きましたが。

——ちょうどいい時に巡り会ったのかな、と思いましたけどね。

川村 それは、さっき言ったように戦争直後の頃には近藤先生は、いわゆる講義というものをしなかったんです。個人的には、六角校舎の研究室に学生が自由にたむろしてて、そういう中で親しく話しておられた。教室で壇上に立って講義するということは、なさらなかったね。形式的なことを好かれなかったのでしょうか。人なつこい方だったんですね。

——それで私などは、先生があまりお話しになってしまうと、それをただ受け身で聞けばいいということになるんですけれども、お話しなさらないものだから今度は自分でいろいろやるわけですね。だから大変勉強になったんです。それを今、学生に言うんですけど、どうも駄目なんです。今の学生は、こちらがやらなきゃ、なんにもやってこない。こっちが黙っていると平気で黙っているんですね。近藤先生のように、みんなにやらせる力がないといけないと思うんですけど、なかなかそういう力がないんで困るんです。

川村 今は、それはなかなかできないでしょう、学生が多くて。——まあ、状況もずいぶん変ったし、学生の気質もまるで変りましたから、昔のような意味で大学と思ったら間違いなのかもわかりませんけどね。

川村 一〇〇人も一五〇人もいて黙っていて、おまえら何か話したいをやれというのは、できないですね。結局こっちが壇上で講義をしちゃうわけ。それじゃいかんと思い、一コマの中三人位を指名して五分位感想等を言わせるようには心掛けていますが。

鈴木 一般論としては僕もそう思いますけれども、たとえば筑波大学の学生と較べると、自分の言いたいことをカラッと言うというのは法政の学生のほうがすぐれていますね。国立大学の学生は、ものを言いませんね。よく言えば慎重、悪く言えばずるいというか、試験なんかは一生懸命やりますけれども、みんなで討論するというようなことあまりやりませんね。

川村 いい子になって、いい点数をとるという傾向なんじゃないかね。いわゆる優良児だね。

正木 川村さんがさっきおっしゃったように、僕らの時もそんなんですよ。近藤先生は終る五分くらい前に来て、「遅くなりました。さあ始めましょう」なんて言うのね。(笑)五分しかないけど、五分で当然終りはしませんよ。そこからが、おもしろかったですね。

川村 後輩に喋るということで、やはり勉強しておく必要があるから、あれは先輩も勉強になったんじゃないですか。

正木 そうですよ。今の学生は二〇分遅れて行ってご覧なさい、誰もいやしないから。

川村 帰っちゃうんですか……。うーん、僕は終りまで近忠さんを待ってたからね。

正木 そうなんです。

## 政治と文学

——ちょうど二〇年代というと、その半ばに例のレッド・パージ問題をめぐっての紛争があり、それから二十七年の五月ですか、血のメーデー事件ですね。あのあと学校の中で犠牲になった近藤君という学生の葬儀が行なわれた時に、大内総長時代でしたけれども大学ではそれを公けには認めないという形で、葬儀に教職員が参加しちゃいかんという告示があったらしいんですね。それでも、黙っていられるかということでは近藤先生なんかお出になったという話を、あとでうかがいました。これは大学の『百年史』の中の文学部のところにもちょっと記載されていますけれども、社会的にもずいぶん大きな事件で、揺れ動いた二〇年代でしたね。敗戦からやや落ちつくというか、変な方向での落ちつきがずいぶん目立ってきた時期でもあったわけですね。

川村 私は、そのメーデー事件の時はすでに卒業しちゃったんです。鈴木さんは大内さんの時までいました？ 僕は野上さんの時までですね。

鈴木 そうです。ぼくは、修士課程を裏表やったり、博士課程に四年ぐらいいたりしましたから、法政にはずいぶんご厄介になりました。高等師範に入ってからだと、かれこれ十五年近くですからね。(笑) だから、もちろん野上総長時代から、その次の錦織先生、大内先生、宇野先生、谷川先生、そして中村先生などと何代かの間いたわけです。

話はかわりますが、昭和二十五年ごろでしたか、イールズという



アメリカの学者が日本の大学を歴訪して、反動的な講演をして歩きましたね。あちこちの大学でボイコットして大変な問題になりました。そういうことを象徴的な出来事として、とにかくその二十五、六年あたりは出版物のきわめて少ない時期ですね。たしか、「赤旗」も、あの頃発行を停止されましたね。つまり、GHQの力で抑えつけられていた時代ですねえ。いわば、一連の思想的ならしが行われた時代といえないでしょうか。

一方で、それと裏腹の関係で特需景気、つまり朝鮮戦争をテコにして、日本は経済的に立ち上がって行くわけです。

その後の、二十八、九年というのは別の意味でまた激動期だったと思います。ナシヨナリズムの高揚期といわれる時代でした。それから文部省の出した『学習指導要領』なんかが急に国家統制をきびしくしはじめたのもそのころです。いろいろな締めつけが強くなってきたように記憶しています。

——逆コースなんていう言葉が使われてきて……。

川村 そうそう。

正木 そうですね。さっきの二・一ゼネストが二十二年でしょう。つまり、それまではアメリカ占領軍というのは解放軍だったわけだ。ところが、あの二・一ストではっきりするわけですよ、占領軍とは何者かが。それから変わってくる。そして、それが二十四、五年の朝鮮戦争準備につながる。二十四年の総選挙で共産党が三十五人当選しちゃったわけですよ。そこで、あわてて……。

鈴木 社会党が内閣をとったこともあるんだからね。

川村 片山内閣ね。

正木 そうそう。それで二十四年六月にレッド・ページ、そして警察予備隊ができ、そして朝鮮戦争と、こうつながってゆく。

鈴木 そういう意味で、さっきちらっと申し上げましたけれども、東宝争議なんかには法政の学生がずいぶん行ったんですね。あれはやっぱり日本のお巡りさん、日本の司法権力が弾圧したというより、GHQがやったんですね。結局、それは朝鮮戦争を起こす前夜の連の思想統制だったわけですね。

正木 組合で僕が行った時だね、きっと。

鈴木 そのころは、学生自治会もメーデーに参加していました。今でも強烈な印象として残っているのは、東京の六大学が中心になって、都内の大学ほとんどが日比谷公園に集合し、全学連の大会をやったことがあるんです。それは、たぶん昭和二十三年か二十四年のことだったと思います。GHQのあった第一生命ビルの前に、まだ、自動小銃を持った青い目玉の大男が立っていました。学生たちは大学の旗を持って、その前をデモ行進したわけです。

正木 それと日本文学の問題ね。日文協ができて最初に取り組んだテーマが、やはり日本民族の本当の独立とはなにかということでした。それは、その後さらに日本文学の問題とか、日本文学の伝統と創造の問題とかという形で、タイトルは変わっても一貫した形で追求がなされてくるわけですね。そのところに、やはりつながる問題だと思ふんだな。

鈴木 そう思います。それで、当時は日本文学協会なんかと併行して民科——民主主義科学者協会というのがありました。あれも、戦後の新しい学術の研究を強力にプロモートしたと思います。

ね。それから一方で「人民文学」と分かれる前の「新日本文学」です。ここに二十二年の「新日本文学」を持ってきたけれども、小田切先生や小原先生が書いているのはわかりますが、なんと西尾実先生も書いていらっしゃるんです。今度、とり出してみてびっくりしました。

**正木** 文学研究あるいは創作活動をやっていく者が、政治の問題と取り組まざるを得なくなった。それがメーデーにも参加し、いろんな所へも出て行くということになるわけでしょう。

**鈴木** 方法論の上では、歴史社会学派と呼ばれるような方法論を次第に確立してゆくわけですね。

**川村** 政治と文学という問題は、ずいぶん論じられたね。結局、行動に出なくちゃ駄目だ、ただ文章に書いていただけじゃ効果があがらないという、なにかそういう焦りがあったんでしょうか。どうなんでしょう、文学というのは行動なんだと……。

**正木** いや、研究ということも行動だろうし、創作も行動だろうしね。

**川村** 広い意味ではそうですね。

**正木** もう一つは、しかし本当に体を動かしてメーデーに参加するというような行動もあるけれどね。

今の政治と文学ということについて一言いいますと、戦争中の僕の在学中に「文豪」という雑誌を文芸学科で出したんです。三号まで出て、四号は出せなくなっちゃった。そのために「文豪」の四号は、予科のほうで「木月」という雑誌を出した時に、それと合わせて合併号として出しているんです。これを最後に「文豪」は終わ

っちゃうんですが……。

**川村** ブンゴウのゴウというのは「さんずい」ですか。そうか、夏目漱石は文豪だという時のブンゴウだと……。 (笑)

**正木** そうじゃなくて、お堀の「豪」ですね。

**川村** だから、わからなかったんだ。なんだろうと……。

**正木** そうそう。報国団の機関誌だったんですよ。

**鈴木** やはり、文学報国会ができて、皇国史観に根ざす天皇制を擁護するような……。

**正木** それはね。予科のこれはたしかに報国団なんだけれども、「木月」の最初の頃に僕は編集にタッチしたんです。その時の顧問が本多顕彰さんなんです。本多先生を一応部長にして、その下僕らは予科のこの雑誌をやっていたわけです。そこへ入江先生なんかも、しばしば顔を出してくれる。本多さんが来ると、ポケットから煙草を出してくれたりする。その編集をやっているところは、だから別天地でしたよ。みんなカーキ色の教練服でゲートル巻いてやっているんですけど、やはり本多さんとか入江さんという自由主義の学者がいて……。

**川村** 入江先生というのは英語の？ あの先生面白かったですよ。日本人ばなれした顔をしてました。

**正木** そうです。やっぱり防波堤になってくれた。

**鈴木** いや、僕が申し上げたかったのは、そういう意味ではなくて、戦後の研究や創作や批評が、そういう文学産報の垢というか罪状というか、そういうものを洗い流すための新たな突き上げではなかったかと思うんですね。そういう意味での政治と文学の問題では

なかったのでしょうか。

**正木** そういうことですね。それで私の本筋に戻ると、「文豪」の二号に近藤先生が「政治と文学」という文章を書いているんです。これは学生たちがお願いして書いてもらったんですが、戦争中ですよ。非常にむずかしいテーマなんだけれども、慎重に言葉を選びながら、やっぱり通すべき筋を通して思うんですね。あの時代、どうしても使わなきゃならない言葉はあったわけです。けど、その中で何かを貫いてゆこうというのが、この近藤先生の文章にはあるし、法政の日文科にもあったんじゃないかと思いますね。

それを、さっき私は言いたかったわけです。それが戦後へきて、いま鈴木さんがおっしゃったような問題になるわけだ。

**鈴木** ええ。それが、いわば伏流水のようになって、もう一回噴き出してきたのが二〇年代じゃないかと。

**正木** そうそう。

### 昭和初期と戦後学生の差異

——鈴木先生の在学した時代の目から、こちらの先生方の時代を見ますと、どういうふうにお感じになるか……。

——だいぶ違いますね。それは、われわれが出ちゃったあとの昭和十何年ですか、西尾さんのいらした頃というのは圧迫されてきているんです。そのあと日本文学報国会とか、そういうものができました。その前が転向の時代ですね。林房雄なんかが、いきなり思想を変えちゃうわけですよ。しかし、ご自分の思想というものは、そ

んなに変わるものじゃないですね。まあ、一種のカモフラージュの転向ですよ。

**正木** そうですよ。

**川村** 要するに、変ったと表面的にでも発表しなくちゃいけなかった。島木健作なんかもそうでしょう。『生活の探究』など。

**鈴木** 一種の擬装転向ですね。

——まあ、佐野学とか鍋山貞親とか林房雄なんかは明らかに全く逆の世界へ行ってしまったわけですが、一般的には、それでも地球は動くじゃないけれども、口には出せないが……。

——林房雄が『西郷隆盛』なんかを書いたのは、転向してからでしょう。だから、ちょっと考えとおもしろいですね。本人がどういうことで本当に転向しているか、あの小説をどういうふうな見方で見るか、今度は読むほうの側ですね。

——それがまた問題ですね。たしか『青年』もそうですね。

——そうです。私は好きな作家じゃないですけどね。そうかと思うと谷崎さんみたいに「中央公論」でストップされた『細雪』、あれをコツコツと書いて戦後に発表したら、とたんにベストセラーになってね。

——だけど御三方の話をうかがっていると、われわれの時代はノンビリしてよかったかと、しみじみ感じますね。

**川村** 考えるとうらやましいですね。朝から神楽坂あたりで……。われわれはそういうことは、できない時代だった。

——われわれの時代は、たとえば就職するにしても——私は三菱に入ったんですけど、その時は戦争末期で、飛行場がいくつもでき

るくらいの敷地を買って、私はそっちへ行っただけです。三菱グループというのは、中で転籍しちゃうんですよ。初めは私は精鋼会社に入りました。

当初は発条なんかを作っていた精鋼会社だったんです。ところが工業会社には石炭と金属と二つあるんです。金属工業のほうは戦後分かれたんですけど、私は三菱鋳業へ転籍させられたわけですね。ところが、三菱の人事というは、学部を卒業した学生を採用するんですね。つまり夜間生を絶対採らない。なぜかという、昼間の学校へ行っちゃんと遊んだやつじゃないと融通が効かない。(笑) 昼間働いて夜学校へ行った人は、汲々として余裕がない。

川村 それは見方にもよるんですけど、昔は専検といって一生懸命独学で検定をとった人がいて、これは大学を出たのよりよく知っているんですね。だけど人間的な幅という点で、いま鈴木さんが言ったように、遊んだのも人間として幅があるという見方もあるわけだ。

鈴木さんあたりを僕らが見てうらやましかったのは、その頃は学部は少ないんだよね。学士様は、まだ価値があった。今は学士号なんて、なんの値打ちもない。修士・博士を取ったって、今は博士浪人が多いんですから。そういう点では、鈴木さんたちは稀少価値なんです。遊びも教養の遊びなんです。

——もっとも、学校へ来たって何人もいないでしょう。先生と、ほとんど一対一のようなものなんです。

正木 鈴木さんの時も、先生と学校以外の場所で話す機会は非常に多かったでしょう。

——ええ、多かったですね。

正木 僕が予科の時の先生たちの話をしますと、たとえば内田百閒さんとか森田草平さんとかのお弟子さんですよ、僕が教わったのは。いま実践女子大の理事長をやっている多田基さんね。多田さんから、よく内田百閒さんの話を聞いたんです。夜中に学生たちが飲んで金がなくなっちゃって、もっと飲みたいという時に内田さんの所へ行っただけなんです。内田先生の家の二階に明りがついていて、長い棒の先で二階の窓を叩くんだった。すると内田先生が出てきて、それから飲んでということがあったとかね。そういう気分が鈴木さんの頃にあったわけでしょう。

——百閒さんというのは、おもしろいんですよ。お金がなくなると、一〇円使って鎌倉まで電車で行って、一〇円借りて帰ってくるんだって。(笑)

川村 あの頃の一〇円といったら、たいしたものですよ。

あの頃は学生が少ないし、今だってまだ一〇人ぐらいだったら、一緒に飲みに行こうやと言えよ。だけど一〇〇人も二〇〇人もいちゃ、誰に声をかけていいかわからない。

——大学の教授会だっておもしろいんですよ。百閒さんと祖父江さんが、しょっちゅう漫才だか喧嘩だかわからないような……。 (笑) それで祖父江さんの英文科の学生が卒業する時に、教授会で「どうもこの学生は単位が一つ足りない。可哀そうだから、なんとかあげてやれ」というんです。じゃ、誰に頼んだらいいか……。森田さんが言い出したんですよ。それで、よく調べたらご本人だったんです。(笑) そういう人だから、講義でもなんでも気紛れと言っちゃ

変ですけど、いい意味での出たとこ勝負というか、発展するんです。

**正木** それが文学部の昭和一の卒業生の方だと、まだあるんですね。

**川村** 先生と学生の心が一体になっているから、それで通ったわけだ。今は通らないでしょう。さっき正木先生が言ったように、二〇分か三〇分遅れて行ったら学生が帰っちゃう。

**正木** ゼミの学生は違うんですよ。

——違いますね。一〇分遅れて行っても報告を始めてます。別に、そうしつめたわけじゃないんだけど、自然とみんなそうなりますね。

**正木** それは杉本さんの人徳ですよ。

——いやいや、そんなことは……。

**川村** ゼミは学生が一〇〇人も二〇〇人もいないでしょう。

——でも、ゼミでありながら三十数人もいます。

——三十数人というのは相当きついですね。

——部屋に入り切れないですからね。

**川村** ゼミなんて二〇人ぐらいで一杯ですね。

——多くても二〇人ですね。一〇人ぐらいだったら本当はいいね。今日は二時間の予定だったんですけど、もうだいぶ時間が過ぎて、そろそろ閉じないと。これは、いずれ雑誌に載せて学生に配るんですけれど、なんらかの刺激になればと思いますね。

**川村** 先輩たちはさっぱり勉強してないんじゃないかと言われると困るな。(笑)

——遊ぶというけれども、勉強するから遊ぶですよ、逆に言え。

**正木** それは私も近藤先生によく言われたんです。「君たちは喫茶店へ行ってお茶を飲むのも勉強ですよ。雑談も勉強です。四六時中勉強です」と。

——本だけじゃ、弾力性とか融通性とか、そんなあとに響くものがないんです。活字面だけでは、いくらその裏側まで読み取っても限度がある。同じものを読んで、お互いに何か喋るということとは、相手は違う読みをしますからいいんじゃないですか。

**正木** 言葉が同じであっても、それ以外の部分というのがありますからね。それが喫茶店でお茶を飲むのも勉強だということだと思えますよ。そういう話を学生にしたら、じゃ先生、酒を飲むのも勉強でしょう、と。(笑)

**川村** 活字では、その文章の意味ですけど、実際につきあうと雰囲気とかジェスチャーとか、いろんな周りのものがあるわけですね。それが気軽に出来るわけでしょう。

**正木** まさに言葉の理論の問題ですよ。活字は抽象的ですから、喋るとなると、その場の雰囲気助けられているんな内容が言葉の中に加わってくるでしょう。

——大変広範囲に、いろんなお話が出てきましたけれども、そろそろこの辺で打ち切らせていただきます。どうも長い間ありがとうございました。